

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	熊谷 眞由美
論文題目	教育者 マッツィーニ ―ロンドンの識字学校を中心に		
（論文内容の要旨） 本論文は、19世紀イタリアのリソルジメント運動を背景とした共和主義的革命家として知られるジュゼッペ・マッツィーニ（1805-1872）の生涯をとおした活動を、「教育者」という観点で捉え返したものである。本論文ではとくに、ロンドン亡命中にマッツィーニがイタリアから移民した子供たちのために開設した識字学校に光をあて、さらにその学校が発行していた二つの新聞『イル・ペッレグリーノ（巡礼者）』と『レドゥカトーレ（教育者）』に掲載されていた記事を分析している。 本論文は、序章「亡命地・ロンドンにおいて与えられたマッツィーニの義務」、第一章「思想と行動」、第二章「ロンドンにおけるイタリア人移民の徒弟のための無料識字学校」、第三章「定期刊行物と学校のその後」、終章「教育者としてのマッツィーニ」から構成されている。 序章では、マッツィーニの教育者としての側面に光をあててきた数少ない先行研究を確認しつつ、ロンドンで彼が開設した識字学校の重要性について説明し、その学校が発行していた定期刊行物である二つの新聞が近年発見された経緯を伝え、最後に本論文の構成について説明している。 第一章では、マッツィーニの養育環境の確認からはじまって、ロンドンに亡命して識字学校の開設にいたるまでのマッツィーニの活動が跡づけられるとともに、彼が22歳で書いた論文「ダンテの祖国愛」と彼の代表作『人間の義務』にそくして、革命家のイメージが強い彼のなかで、「教育」が大きなテーマとなっていたことが示されている。またその際、マッツィーニが教育を知的な側面を強調する「知育istruzione」と、利他の精神を強調する「徳育educazione」に区分し、後者の「徳育」を重視していたことが示されている。 共和主義思想を抱く父親とジャンセニズムの熱心な信仰者であった母親のもとで養育された彼は、秘密結社に加入して逮捕され国外追放にされる。フランス、マルセイユでは「青年イタリア」を結成し、その蜂起計画に対する弾圧によって欠席のまま死刑判決を受ける。さらに潜伏先のスイス、ベルンで「青年ヨーロッパ」を結成するが、これも組織として崩壊する。この失敗の連続ののち、彼はロンドンで悲惨な労働者たちと出会うとともに、カーライル夫妻をはじめロンドンの知識人との交流も深めてゆく。本章ではこのようなマッツィーニの思想と活動が次第に識字学校の設立へと収斂してゆくさまが確認されている。 第二章では、マッツィーニが創設した識字学校がどのようなものであったかが、生徒であるイタリア人移民、学校の運営にあたった教員、この事業に賛同したイギリス人の支援			

者にそくして、活動面・財政面から具体的に検討をくわえている。たえず苦しい状況に陥りながらも、マッツィーニの学校は同時代のイギリス社会の博愛と慈善の精神にも支えられて、7年間にわたって存続することになる。ここではとくに、毎年学校で開催された記念祭やチャリティー・コンサートの模様が、新聞記事などを参照して生き生きと捉えられている。

また、本章の後半においては、カトリックの司祭によるマッツィーニの学校への攻撃が考察されている。司祭はマッツィーニの学校を敵対視して、宗教的にはカトリックであった生徒たちに恐怖を与えたが、マッツィーニが司祭からの攻撃に冷静に対処していたことが示されている。

第三章は、新聞『イル・ペッレグリーノ』と『レドゥカトーレ』の内容を紹介し分析することに取り組んでいる。マッツィーニの学校が発行していたこの二つの新聞は、マッツィーニの学校の教育内容を掘り起こす際の、現在のところ唯一の手掛かりとなっているものである。

『イル・ペッレグリーノ』は学校開設の7ヶ月後1842年6月4日から1843年6月17日まで、週1回刊行されていたものである。そこに掲載されている記事が読者である子供たちに「イタリア」という共通の故郷を思い起こさせるものとなっていること、さらに新聞のタイトルにもなっている「ペッレグリーノ（巡礼者）」が学校を運営していた亡命者たちの姿と重なっていること、同時に学校の置かれていた現実を反映させた記事も見られることなどが説かれている。一方『レドゥカトーレ』は『イル・ペッレグリーノ』のあとを受けて1843年8月5日から1844年8月24日まで15日毎に発行された。ここでは『イル・ペッレグリーノ』の内容を引き継ぎながらも、時事性の強い記事が掲載されていること、マッツィーニの格言調の署名記事が毎号掲載されていることなどが示されている。

さらに、マッツィーニのロンドンの識字学校がアメリカ合衆国におけるイタリア人移民のための学校の開設、ウルグアイ、モンテネグロでのイタリア人移民労働者のための学校の開設を促し、マッツィーニのロンドンの識字学校が閉鎖されたあとも、「教育者」マッツィーニの精神は世界中の「マッツィーニ主義者」たちによって継承されていったことを確認している。

終章では、本論文の各章の内容を振り返りながら、革命家マッツィーニではなく、教育者としてのマッツィーニに光をあててきたことの意義を確認し、世界中のマッツィーニ主義者たちが彼の利他の精神をどのように継承していったかを追跡することによって、教育者マッツィーニの姿もさらに掘り下げることができるだろうと今後の展望を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、共和主義的革命家として当時の保守勢力を慄かせていたマッツィーニというイメージに対して、「教育者」としてのマッツィーニに光をあてた貴重な研究と呼べる。その際、現時点ではまだ本格的には論じられていない、彼が亡命地ロンドンで開設した識字学校の意義に焦点があてられている点も高く評価することができる。さらにその識字学校の学習内容を確認するという困難な課題に、近年発見された、同校が発行していた新聞『イル・ペッレグリーノ』と『レドゥカトーレ』の記事を分析する方法で取り組んでいることも、称賛に価するといえる。

序章では、教育者マッツィーニに関する先行研究が整理され、二つの定期刊行物が発見され、復刻版が出版されるにいたる経緯が丁寧に説明されている。

第一章では、マッツィーニがロンドンで識字学校を開設するにいたるまでの経緯が説明されているが、22歳の時点で彼が執筆した「ダンテの祖国愛」、さらにロンドンで執筆した『人間の義務』を読み解くことによって、一方でマッツィーニが若いころから教育を重視する視点を持っていたこと、他方で蜂起計画の失敗や組織の解体という困難をへて、イギリスにおける労働者およびイギリスの知識人との出会いと交流のなかで現実との接点を手探りし、無料学校の設立にいたるという流れが説得力をもって描き出されている。

第二章では、マッツィーニの開設した識字学校の実態が、数少ない先行研究、当時の新聞記事などから掘り起こされている。とくに、マッツィーニの学校を攻撃した司祭の言動、それによる一般新聞紙上の論争を粘り強く取り上げているところは特筆に値するといえる。

第三章では、マッツィーニの識字学校が発行していた二つの新聞『イル・ペッレグリーノ』と『レドゥカトーレ』の内容が申請者の設定したキーワードにそくして紹介・分析されている。この二つの新聞はようやく近年発見され復刻されたものだけに、申請者の研究はじつに先駆的なものである。この果敢な取り組みは高く評価されるべきである。

終章では、マッツィーニの利他の精神、それを体現していた無料識字学校が、彼の死後、どのように継承されているかが確認されている。マッツィーニの精神のなかで引き継がれるべき重要な要素として「教育」があることをあらためて強く印象づける結びとなっている。

このように本論文は、従来の革命家マッツィーニに対して教育者としてのマッツィーニの姿を描き出し、その際、彼が開設した無料識字学校に焦点を置き、その学校が発行していた二つの新聞の内容を確認しているという点で、まことに意義深いものだが、審査においていくつかの疑問点も出された。

一つは、本論文のマッツィーニについての「伝記」的研究が、歴史学としてのイタリア及びイギリスの近代史研究、近代教育史研究、19世紀文学史研究への接合が不十分ではないかという点である。

その中でも、マッツィーニのダンテ論を考察する際に、19世紀における国民の起源への関心と結びついたダンテ受容という時代に共通の文脈にもっと目配りをする必要がある、という指摘もなされた。『レドゥカトーレ』で取り上げられるイタリア人に中世の人物が多いことから、同時代の中世主義やロマン派との関連をもっと掘り下げる必要も示唆された。リソルジメントと結びついたイタリアのロマン派は国民の教育を重視しており、それに対してマッツィーニの思想がどの程度独自であるのかという問いかけもあった。

さらに、最終的にマッツィーニの学校が「成功した」というまとめかたになっているが、その際の「成功」の基準が示されていない、という疑問も出された。他の学校と比較したロンドンの識字学校的位置付けや、史料としての新聞を読み解く際のキーワード設定の基準をより明瞭にする必要も指摘された。

これらの指摘はいずれも、マッツィーニに対する申請者の強い情熱の影で見落とされている問題であり、今後申請者が研究を進めるなかで取り組むべき方向に関する貴重なアドバイスでもあって、それによって本論文の価値そのものが否定されるものではないと審査委員会は判断した。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降